The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イギリス英語における離接詞likelyの用法 : 1600年代から1900年代後半までの変遷
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2017, 41, p. 27-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

イギリス英語における離接詞 *likely* の用法

－1600 年代から 1900 年代後半までの変遷－

大津　智彦

1　導入

大津（2011）の導入部で述べたように、文法書や辞書などでは現代英語における離接詞としての *likely* の用法について一定の了解がある。つまり、イギリス英語においては *likely* が単独で使われることは少なく、*most likely* や *very likely* などのように強意副詞を伴って現れるのに対し、アメリカ英語では *likely* が単独で用いられることが頻繁にあるとされる。例えば OED Second Edition（1989）における "Now chiefly *most likely, very likely* ; otherwise rare exc. *Sc. dial.,* or（freq.）*N. Amer.*" という記述は典型的なものである。その他には、Huddleston & Pullum（2002 : 769）はイギリス英語における *likely* について、"it more or less requires a modifier, as in : *He has quite likely gone home by now.*" としている。また、Quirk et al.（1985 : 620）では "some degree of doubt" を表す離接詞を列挙しているが、*likely* に対してのみ *most likely, quite likely, very likely* のように強意副詞と組み合わせて記載し、*likely* が単独で出現する場合には、〈informal〉という但し書きを付けている。

さて、ここで英語史の研究者にとって疑問として湧いてくるのは、どのようにして英米でこのような差異が生まれたのかということである。①アメリカ英語では *likely* の単独使用が頻繁にあるというがそれはいつから始まり、どの程度のものなのか。また、②イギリス英語では *most* や *very* との共起が普通とされるが、それもいつから始まり、どの程度のものなのであろうか。

大津（2011）は前者①の疑問を調査するため、Brigham Young University の Mark Davies がウェブサイト上で公開する Corpus of Historical American English（COHA）を 1810 年から 2000 年まで 50 年刻みで検索し、次の 3 点を明らかにした。

・1800 年代前半においては強意副詞を伴う場合が 80% 以上であったものが、徐々に単独使用の比率が高くなり、現在では逆に単独使用が 80% 程度となっている。
・単独使用の増加は Newspaper や Fiction といった比較的 formality の低いテキストジャンルから拡散していった。
・*likely* の単独使用の増加は *likely* の使用頻度の増加と強く結びついている。これは強意副詞を伴わないため蓋然性が低い場合にも *likely* の使用が可能になり、その使用頻度が増したということである。

上にアメリカ英語における離接詞としての *likely* は、初めから単独での使用が頻繁にあったわけではなく、少なくとも 1800 年代前半には現在のイギリス英語と同じように強意副詞を伴っていた場合が圧倒的に多かったと記した。1800 年代前半のアメリカ英語は 1776 年のアメリカ独立までにイギリス人が移住とともに持ち込んだ英語の特徴をまだまだ色濃く残していたはずである。ということは、イギリス英語において現在、離接詞 *likely* に強意副詞が伴うことが多いのは当時の状態をいまだに維持しているということなのだろうか。

ところで不思議なのは、OED 2nd edition で挙げられているイギリス英語における離接詞 *likely* の用例は大部分が強意副詞を伴わず *likely* が単独で用いられたものなのだが、特に 1380 年の Wycliffe から 1700 年代までは単独使用の用例ばかりなのである[1]。また、オンラインで検索する OED Online においては、定義に "Frequently in *most* (also *very*) *likely*" とした後、下に引用したように、プリント版とは一部、用例の入れ替えが見られるが、挙げら

れている用例はやはり 1395 から 1700 年代半ばに至るまで circa 1540（?ante 1400）の 1 例を除きすべて単独使用の例ばかりである。

►1395 J. Purvey *Remonstr. against Romish Corruptions*（Titus）（1851）93（*MED*）, He myghte . . licli waste lesse the godis of the chirche.

?*c* 1425 T. Hoccleve *De Regimine Principum*（Royal 17 D.vi）（1860） 15 And likly that thow deemest for folie Is gretter wisdome than thow canst espie.

c 1475 （►?*c* 1400）Wyclif *Sel. Eng. Wks*.（1871）III. 434（*MED*）, Likliche hem wantiþ to be þe leeste membre þat Crist haþ ordeyned to be of his Chirche.

a 1500 （►?1382）Wyclif *Sel. Eng. Wks*.（1871）III. 170（*MED*）, If a man do þis almes to him þat lyveþ yvyl . . it is al on to norische hym wityngly or lickly.

c 1540 （►?*a* 1400）*Gest Historiale Destr. Troy*（2002）f. 5, He were seker . . of hym euer And most likly be loste & his los keppit.

1579 in R. Travers *Expos. CXI. Psalme* Ep. Ded. sig. *ij^{v}, His life . . by quietnes in his Colledge, should likely haue bene prolonged.

1603 R. Johnson tr. G. Botero *Hist. Descr. Worlde* 104 When of one house there be three or fower brethren, likely one or two of them giue themselues to trafique and merchandize.

1650 J. Trapp *Clavis to Bible*（Deut. xxxiv. 8）159 The children of Israel . . were ready to wish,（likely）as the Romanes did of Augustus, that either he had never been born, or never dyed.

1754 J. Shebbeare *Matrimony*（1766）I. 15 The young Man who is to succeed him may likely spend his Fortune.

これらのことから、離接詞 *likely* はイギリス英語におけるその初出から必ず

しも強意副詞を伴っていたわけではなく、英語が史的に変化する過程の中で強意副詞を伴うケースが増加し、その後また歴史に逆行するかのように、(現代アメリカ英語においては実証されているが) 単独使用が出現するようになったのではないかと推測される。

本研究ではこの点を検証するため、1600 年以降にイギリスで出版されたフィクションを中心とするコーパスを検索し、離接詞 *likely* の用法の推移を調査する。なお、これは冒頭第 2 段落目に挙げた②の疑問を解く試みである。以下、セクション 2 では今回用いるコーパスの紹介と調査方法の解説を行う。セクション 3 においては検索結果の提示と分析の順に話を進める。セクション 4 はまとめである。

2　使用したコーパスとデータの抽出

使用したコーパスは下記のとおりである。British National Corpus (BNC) 以外については著者・作品名を付録に記載した。

- 1600 年代から 1900 年代前半にかけてイギリス人によって執筆されたフィクションを中心とする合計約 160 の作品。電子ファイルを Project Gutenberg よりダウンロードした。ただし、1600 年代はフィクションが少ないため日記、私信、随筆などを含む。
- 1600 年代については作品数が少ないこともあって、口語的でフィクションに近いテキストジャンルとして散文演劇 40 作品を加えた。すべて Chadwyck-Healey の Literary Collections に所収のものである。
- 現代イギリス英語における直近の状況を調べるため BNC の written part のうち fiction を検索した。

コーパスとして主にフィクションを使用したのは、1600 年代を除いて作品数が多く、入手が容易であること、また大津 (2011) で近代英語期におい

て離接詞 *likely* が比較的頻繁に現れるテキストジャンルであることが判明しているためである。ヘルシンキコーパスやその他、近代英語研究用に編まれたコーパスは今回の研究目的には総語数が十分でないため使用しなかった。

データの抽出にあたっては、Project Gutenberg および Chadwyck-Healey から入手した電子ファイルについては、TXTANA というコンコーダンサーを用いて *likely* をキーワードとして含む全ての文を検索し、その中から離接詞 *likely* を含む文のみを手作業で抽出した[2]。BNC に関しては Mark Davies が Web 上で公開している BYU-BNC を用いて同じく *likely* をキーワードとして含む全ての文を検索し、その中から離接詞 *likely* を含む文のみを手作業で抽出した[3]。

3　調査結果と分析

3.1　時代別変遷

表 1 は時代別に離接詞 *likely* が強意副詞を伴う場合と伴わない場合に分けて大きな歴史的な流れを示したものである。時代により抽出できた用例数が異なるが、これはコーパスの語数が各時代で異なることによる。本来はノーマライゼーションを行うべきであるが、今回は大きな流れを明らかにすることを第一の目的としており、各時代の傾向を示すためにはある程度以上の用

表 1　離接詞 *likely* を修飾する強意副詞の有無：時代別頻度

	強意副詞あり (a)	強意副詞なし (b)	合計 (a) + (b)	なしの比率（%） (b)/(a) + (b)
17 世紀	2	12	14	86
18 世紀	15	0	15	0
19 世紀	77	12	89	13
20 世紀前半	19	2	21	10
20 世紀後半（BNC）	206	52	258	20

例数を集められたと思われる。

さて、この表でまず注目すべき点は、17世紀において離接詞 *likely* が強意副詞の修飾を受けずに単独で現れるケースが86%と非常に高いことである。これは現代イギリス英語に対するOEDや文法書の記述とは大きくかけ離れており、離接詞 *likely* の史的変遷をたどる上で興味深い事実である。筆者は導入において、OEDにおける用例がその初出から1754年までほとんどが強意副詞を伴わない単独使用であるため、離接詞 *likely* は必ずしも初めから強意副詞を伴っていたわけではなく、英語が史的に変化する過程の中で強意副詞を伴うケースが増加してきたのではないかと推測した。さらなる精査が必要であるものの、この86%という数値はその推測を実証するものである。また表1によると、17世紀には単独使用の比率が86%であるものが、18世紀には0%になっており、単独使用と強意副詞との共起使用の境目がOEDに挙げられた用例が示す通り、17世紀と18世紀の間にあることを示唆している。ただ、表1では比率が86%から0%へとあまりにも急激な落ち込みを示しているのはどういうわけだろうか。抽出された用例を詳しく見てみると、17世紀の単独使用の12例中9例までがPepysの日記に由来する。いくつか次にその例を挙げてみよう。

(1) It will likely prove his ruin. (Pepys 1660-69)

(2) Some people have got the bit into their mouths, meaning the Duke of Buckingham and his party, and would likely run away with all. (Pepys 1660-69)

(3) He was sorry to see it, and the inconveniences which likely may fall upon me. (Pepys 1660-69)

これはPepysの日記が今回使用した17世紀のコーパスに占める割合が非常に大きいこともあるだろうが、日記という口語的なジャンルが18世紀以降のコーパスを構成する小説とは異なるためこれだけ大きな差が現れた可能性がある。だが、小説も引用符に囲まれた会話を多く含むし、語りの部分でも

いかにも話しかけるような口語的なものもある。単独使用の残り 3 例のうち 2 例が散文演劇のセリフであることも考え合わせると、17 世紀においては、少なくとも口語および口語的な書き言葉では離接詞 *likely* は単独での使用頻度のほうが高かった可能性が十分にあり、18 世紀以降、単独使用は大きく衰退し、強意副詞に修飾される *likely* が口語や口語的な書き言葉においても主流となったと考えられる。

しかし、今回の調査ではその変化が急激すぎてどのような過程でそのような推移が起こったのかという謎が残る。なぜ 17 世紀まで単独使用が盛んに行われていたものが 18 世紀には強意副詞との共起使用に変わったのか。そこにはいかなる必然性があったのか。そしてそれはどのように広がっていったのか。今回の調査ではその転換の時期が 17 世紀から 18 世紀にかけてである可能性が高いことがわかったので、今後、口語的な書き言葉のみならず、テキストジャンルの幅を広げるとともに時代を 30 年から 50 年刻みにするなどして、詳細な調査を行い上記の謎の解明に取り組みたい。

次に注目したいのが 20 世紀後半の動きである[4]。表 1 から離接詞 *likely* の単独使用の比率が 20 世紀前半に比べ倍になり、この時期に大きな変化が起こったことがわかる。例を下にいくつか挙げてみる。すべて BNC からの引用である。

(4) Likely any car would have traces of it for a long time.
(5) I knew there likely wouldn't be any stairs.
(6) I could likely avoid punishment.
(7) I was talking to one of Big Joe's bouncers and it was his opinion that she got wind of what was to happen, before they had time to give her a dose, likely.

フィクションで単独使用が 20% 位の頻度になると OED Online の "Frequently in *most* (also *very*) *likely*" は受け入れられても、OED Second Edition (1989) における "Now chiefly *most likely, very likely*; otherwise rare exc. *Sc.*

dial., or (freq.) *N. Amer.*" とする記述はもはや現実に即していないと言える。ではなぜ20世紀後半にこのような変化が起こったのであろうか。この問題については、離接詞 *likely* の単独使用への変化が先行して起きたアメリカ英語の影響を抜きにしては考えられないだろう。大津（2011）は COHA をコーパスとして使用し、アメリカ英語のうち、フィクションのテキストジャンルにおいては離接詞 *likely* の単独使用の比率は19世紀前半には20% であったものが20世紀前半になり61% へと急激に増加し、2000年代には75%まで伸びていることを実証した。BNC のフィクションから抽出したデータから生まれた20% という比率はアメリカ英語のそれに比べると格段に低い数値ではあるが、アメリカ英語の後を追う形でイギリス英語でも離接詞 *likely* の単独使用が増加しているのは明らかである。よって、アメリカ英語の影響を受けた可能性は十分に考えられる。イギリス英語の20世紀後半における単独使用の調査もコーパスとしてはフィクションを用いただけなので、書き言葉の他のテキストジャンルや口語ではどの程度の広がりを見せるのか、2016年の現時点以降でもさらなる伸びを遂げつつあるのか今後の研究課題としたい。

3.2 離接詞 *likely* の起源について

ここまで離接詞 *likely* が強意副詞を伴うか否かに焦点を当て1600年代からの推移を辿ってきた。このセクションでは離接詞 *likely* と同音同形の形容詞 *likely* を用いる "It is likely that . . . ." 構文との関係を考えてみたい。この問題は一見、離接詞 *likely* を修飾する強意副詞の有無とは関係がないかのように思えるが、今回、初期近代英語からの用例に目を通していて、両者の関係性を示唆するような用例に幾つか出会った。次の例を参照されたい。

(8) It is likely that he lived on discontented through the rest of Queen Anne's reign. (Johnson 1779-1781 b)

(9) Most likely indeed it is, that he founded his opinion on very good authority.

(Fielding 1749)

(10) Very likely, sir, that it may seem so. (Congreve 1700)

(11) Now it is likely the Chancellor might, some time or other, in a compliment or vanity, say to the Duke of York, that he was weary of this burden.

(Pepys 1660-1669)

(12) Very likely he may be your sincere friend. (Fielding 1749)

(13) It will likely prove his ruin. (=(1)) (Pepys 1660-69)

(8) はいわゆる "anticipatory *it*" を主語とし、*that* 節を補文として従える形容詞 *likely* を用いた構文である。この構文の *likely* の部分が前置されたのが (9) で、そこからいわゆる "anticipatory *it*" と繋合詞までが省略されたのが (10) である。ちなみにこの "It is likely that . . . ." 構文の接続詞 *that* は (11) のようにしばしば省略されることがあり、(10) の段階に来た文に接続詞 *that* が省略されると (12) となるが、上に OED Online から引用した Hoccleve (?*c* 1425) や Wycliffe (*c* 1475) の用例からわかるように、ここまでくれば *likely* は副詞として分類される。そしてこの副詞は離接詞として (13) のように助動詞の後に現れることが可能なのである[5]。OED Online では *likely* のこれら形容詞もしくは副詞としての用法の初出が両方とも 1395 年となっており、しかも同著者の同著作から引用して用例を挙げている。*likely* は形容詞も副詞も同音同形であるが、加えて形容詞を派生する接尾辞-*ly* が副詞を派生する接尾辞-*ly* と同音同形あるため、形容詞か副詞かの区別が形からは付け難い[6]。離接詞 *likely* が形容詞とは独立して発達したという考え方もあるが、上に見た過程に従って形容詞から派生した用法である可能性は十分考えられる。これに関しては、OED Online が離接詞 *likely* の最初期 (中英語) の用例として挙げている 3 例中 2 例において *likely* が文頭に現れている点に注目したい。また、OED では最初期 3 例まですべて *likely* が文頭に現れている。

ここまで "It is likely that . . . ." 構文と離接詞 *likely* の関係の深さを見て

きたが、それは強意副詞が離接詞 *likely* を修飾するか否かの問題とどう関わりがあるのか。これは現時点では推測であるが、1600年代まで *likely* の単独使用が多いのは、"It is likely that . . . ." 構文の *likely* を強意副詞が修飾することが少なかったため、上記のように形容詞から離接詞へと異分析される際に強意副詞を伴わない単独使用の形で現れたのではないかと考えられるのである。この点については、上に記したように離接詞 *likely* の使用は中英語期から始まっているので、当時の用例にまで遡って実証する必要がある。

4　まとめ

以上、イギリス英語における離接詞 *likely* に関して、*very* や *most* 等の強意副詞を伴って使用されるか否かという観点を中心に、1600年代から1900年代後半までの変遷を、主にフィクションをテキストジャンルとするコーパスを利用して調査した。その結果、①1600年代では強意副詞を伴う比率が非常に少なく単独使用が大多数を占め、②1700年代から180度の転換を起こしたがごとく強意副詞を伴う例が圧倒的多数を占めるようになり、この状態が1900年代前半まで続くが、③1900年代後半からは単独使用が復活の兆しを見せ、それまでの2倍程度の比率で現れるようになった、ということが明らかになった。

今後の課題としては、第一には、なぜ17世紀には離接詞 *likely* の単独使用が盛んに行われていたものが18世紀以降急激に強意副詞との共起使用に変わったのかについて日記や散文演劇など口語的な書き言葉のみならず、テキストジャンルの種類を増やすなどして幅広い調査を行い、共起使用拡大のより綿密な研究を行わなければならない。第二には、20世紀後半になりイギリス英語において単独使用が増加した点が課題となる。今回はそれをフィクションをコーパスにして確認しただけであるので、テキストジャンルの種類を増やすとともに現時点でも単独使用の増加傾向が続いているのか調査をする必要がある。第三には、17世紀において単独使用が大多数を占めてい

る理由である。OED や OED Online に引用されている用例から 17 世紀以前においても離接詞 *likely* は単独使用が主流であったと推測されるが、筆者はこれを "It is likely that . . . ." 構文から異分析が起こって離接詞 *likely* が生まれたという推論に基いて説明を試みた。OED や OED Online には両者の初出例が 14 世紀後半より挙げられているが、そのあたりの時代の言語資料を丹念に調べて実証しなければならない。

今回のように、英語においてある用法が生まれ、一旦衰退したあと復活するというケースは筆者の管見では他に例を知らない。そのメカニズムを探ることは言語変化の複雑さや多様性をまたひとつ明らかにするという意味で興味深いことだと考えている。

注

1 OED 2nd edition の 1900 年代における単独で使用される離接詞 *likely* の用例の多くはアメリカ英語の語法を例証したものである。

2 Project Gutenberg の電子ファイルには現代の編集者の解説や脚注が入っている場合があるので、用例はひとつずつ確認しながらそのような部分から検索されたものは除外した。

3 BYU-BNC を使用するにあたっては注意すべきことがある。それは、キーワード検索を行った際、そのキーワードを含む全く同一の文が検索結果として 2 度現れることが少なからずある点である。よって、筆者の場合、検索結果をもう一度 TXTANA で検索した後、*likely* の右側の語でソートをかけて同一の文が並ぶようにして、同一の文を 2 度合計することを避ける工夫をした。

4 より正確に言えば、BNC の written component は 1975 年（一部は 1964 年）以降のテキストから構成されている。

5 ちなみに同様の過程は "I think that . . . ." 構文でも接続詞 *that* が省略された後、"I think" の文法化が起こり、文中や文尾に現れる現象として観察される。(Thompson and Mulac (1991 : 317))

6 OED、OED Online ともに *likely* の異綴を最初期（中英語）から形容詞、副詞の区別をせずに扱っている。なお、OED によると、"It is likely that . . . ." 構文の初出は 1380 年である。

参考文献

Austin, F. (1996) "Points of Modern English Usage, LXXII." *English Studies,* Vol.77, No.1 : 101-2.

Davies, Mark. (2004-) *BYU-BNC*. (Based on the British National Corpus from Oxford University Press). Available online at http : //corpus.byu.edu/bnc/.

Davies, Mark. (2010-) The Corpus of Historical American English (COHA) : 400 + million words, 1810-2009. Available online at http : //corpus.byu.edu/coha.

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge : Cambridge University Press.

Longman Dictionary of Contemporary English 5th Edition. (2009) Harlow : Pearson Education Limited.

Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM (v.4.0). (2009) Oxford : Oxford University Press.

OED Online (2016) Oxford University Press, September 2016. Web.8 September 2016.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Harlow : Longman.

Thompson, Sandra A. & Anthony Mulac (1991) "A Quantitative Perspective on the Grammaticization of Epistemic Parentheticals in English." In Traugott, E. C. & B. Heine eds., *Approaches to Grammaticalization,* Vol.II. Amsterdam : John Benjamins. 313-29.

大津智彦 (2011)「アメリカ英語における離接詞 *likely* の用法：1810 年から 2009 年までの変遷」『通時的・共時的英独コーパス言語学のインターフェイス』(大阪大学言語文化研究科)：1-7.

Appendix

フィクションなど (初版年順)

Milton, John	1667	*Paradise Lost*
Bunyan, John	1666	*Grace Abounding*
	1678-84	*The Pilgrim's Progress*
	1682	*The Holy War*
Dryden, John	1677	*All For Love*
Pepys, Samuel	1660-69	*The Diary of Samuel Pepys*
Behn, Aphra	1684	*Love-Letters between a Noble-Man and his Sister,* Vol.I
	1685	*Love-Letters between a Noble-Man and his Sister,* Vol.

		II
	1687	*Love-Letters between a Noble-Man and his Sister,* Vol. III
	1688	*Oroonoko : or, the Royal Slave*
Barker, Jane	1715	*Exilius*
Defoe, Daniel	1719	*Robinson Crusoe*
	1722	*Moll Flanders*
Manley, Delarivier	1714	*The Adventures of Rivella*
Arbuthnot, John	1712	*The History of John Bull*
Swift, Jonathan	1704	*A Tale of a Tub*
	1710-13	*The Journal to Stella*
	1724-25	*The Drapier's Letters*
	1726	*Gulliver's Travels*
Congreve, William	1692	*Incognita ; or, Love and Duty Reconcil'd*
	1693 a	*The Old Bachelor : a Comedy*
	1693 b	*The Double Dealer*
	1695	*Love for Love*
	1697	*The Mourning Bride*
	1700	*The Way of the World*
Gay, John	1711	*The Present State of Wit*
	1728	*The Beggar's Opera*
Berkeley, George	1709	*An Essay Towards a New Theory of Vision*
	1710	*A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge,* Part I
	1713	*Three Dialogues between Hylas and Philonous*
	1729	*George Berkeley to Samuel Johnson* 1
	1730	*George Berkeley to Samuel Johnson* 2
Richardson, Samuel	1740a	*Pamela,* I
	1740b	*Pamela,* II
Haywood, E. Fowler	1744	*The Fortunate Foundlings*
	1748	*Life's Progress Through the Passions*
Fielding, Henry	1742	Joseph Andrews
	1749	*History of Tom Jones, a Foundling*
	1751	*Amelia,* Volumes 1-3

Johnson, Samuel	1729	*Samuel Johnson to George Berkeley*
	1730	*Samuel Johnson to George Berkeley* 2
	1775	*A Journey to the Western Isles of Scotland*
	1779-81a	*Lives of the Poets,* Volume 1
	1779-81b	*Lives of the Poets,* Volume 2
	1779-81c	*The Life of Ascham*
	1779-81d	*The Life of Browne*
	1779-81e	*The Life of Milton*
Sterne, Laurence	1759-67	*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman,* Vols.1-9
	1768	*A Sentimental Journey Through France and Italy*
Walpole, Horace	1735-48	*The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford,* Volume 1
	1749-59	*The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford,* Volume 2
	1759-69	*The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford,* Volume 3
	1764	*The Castle of Otranto*
	1770-97	*The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford,* Volume 4
Smollett, T. George	1753	*The Adventures of Ferdinand Count Fathom*
	1760	*The Adventures of Sir Launcelot Greaves*
	1766	*Travels through France and Italy*
Burke, Edmund	1777	*Address to the British Colonists in North America*
	1790	*Reflections on the Revolution in France*
Goldsmith, Oliver	1765	*The History of Little Goody Two-Shoes*
	1766	*The Vicar of Wakefield*
Boswell, James	1785	*The Journal of a Tour to the Hebrides*
	1791a	*Life of Johnson* (1709-1765)
	1791b	*Life of Johnson* (1765-1776)
	1791c	*Life of Johnson* (1776-1780)
	1791d	*Life of Johnson* (1780-1784)
Godwin, William	1794	*Things as They Are or the Adventures of Caleb Williams*

Beckford, W. Thomas	1783	*Dreams, Waking Thoughts, and Incidents*
Radcliffe, Ann	1794	*The Mysteries of Udolpho*
	1797	*The Italian, or the Confessional of the Black Penitents*
Edgeworth, Maria	1796	*The Parent's Assistant*
	1800	*Castle Rackrent*
	1812	*The Absentee*
Scott, Walter	1814	*Waverley*
	1816a	*The Antiquary*
	1816b	*The Black Dwarf*
	1818a	*Rob Roy*
	1818b	*The Heart of Mid-Lothian*
	1819a	*Ivanhoe*
	1819b	*A Legend of Montrose*
	1825	*The Talisman*
Coleridge, S. Taylor	1817	*Biographia Literaria*
Austen, Jane	1796-1817	*Jane Austen's letters to her sister Cassandra and others*
	1811	*Sense and Sensibility*
	1813	*Pride and Prejudice*
	1814	*Mansfield Park*
	1815	*Emma*
	1818a	*Persuasion*
	1818b	*Northanger Abbey*
Peacock, T. Love	1816	*Headlong Hall*
	1831	*Crotchet Castle*
Shelley, Mary	1818	*Frankenstein*
	1826	*The Last Man*
Lytton, E. B. Lytton	1834	*The Last Days of Pompeii*
Disraeli, Benjamin	1826	*Vivian Grey*
	1833	*Alroy or The Prince Of the Captivity*
Gaskell, Elizabeth	1851	*Cranford*
	1857	*The Life of Charlotte Bronte*
Dickens, Charles	1841	*Barnaby Rudge*
	1843	*A Christmas Carol in Prose : Being a Ghost Story of Christmas*

	1846-48	*Dombey and Son*
	1860-61	*Great Expectations*
	1867	*No Thoroughfare*
Trollope, Anthony	1863	*Rachel Ray*
	1864	*Can You Forgive Her?*
	1869	*Phineas Finn*
	1871	*The Eustace Diamonds,* Vol.I
	1874a	*Phineas redux*
	1874b	*Lady Anna*
	1881a	Ayala's Angel
	1881b	*Dr. Wortle's School*
Brontë, Charlotte	1847	*Jane Eyre*
Brontë, Emily	1847	*Wuthering Heights*
Eliot, George	1859 a	*Adam Bede*
	1859 b	*The Lifted Veil*
	1861	*Silas Marner*
	1864	*Brother Jacob*
	1871-72	*Middlemarch*
Brontë, Anne	1847	*Agnes Grey*
	1848	*The Tenant of Wildfell Hall*
Collins, Wilkie	1860	*The Woman in White*
	1868	*The Moonstone*
	1878	*The Haunted Hotel*
Carroll, Lewis	1865	*Alice's Adventures Under Ground*
	1871	*Through the Looking-Glass*
Hardy, Thomas	1887	*The Woodlanders*
	1891	*Tess of the d'Urbervilles*
	1895	*Jude the Obscure*
Stoker, Bram	1897	*Dracula*
	1905	*The Man*
	1909	*The Lady of the Shroud*
	1911	*The Lair of the White Worm*
Stevenson, R. Louis	1882	*New Arabian Nights*
	1883	*Treasure Island*

	1886 b	*The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*
	1886 a	*Kidnapped*
	1891	*In the South Seas*
Conrad, Joseph	1895	*Almayer's Folly*
	1896	*An Outcast of the Islands*
	1900	*Lord Jim*
	1904	*Nostromo : A Tale of the Seaboard*
Doyle, Arthur Conan	1904	*The Return of Sherlock Holmes*
	1906	*Sir Nigel*
	1912	The Lost World
Kipling, Rudyard	1901	*Kim*
	1906	*Puck of Pook's Hill*
	1916	*Sea Warfare*
Wells, H. George	1895	*The Time Machine*
	1896	*The Island of Dr Moreau*
	1897	*The Invisible Man*
	1898	*The War of the Worlds*
Galsworthy, John	1906-21	*The Forsyte Saga*
Saki	1904	*Reginald*
	1910	*Reginald in Russia*
	1914	*When William Came*
Maugham, W. Somerset	1897	*Liza of Lambeth*
	1908	*The Magician*
	1915	*Of Human Bondage*
	1919	*The Moon and Sixpence*
Joyce, James	1914	*Dubliners*
	1916	*A Portrait of the Artist as a Young Man*
	1922	*Ulysses*
Walpole, Hugh	1916	*The Dark Forest*
	1922	*The Cathedral*
Lawrence, D. Herbert	1920	*Women in Love*
	1925	*St. Mawr*
	1928	*Lady Chatterley's Lover*

演劇作品（初版年順）

Marston, J.	1605	*The Dutch Courtezan*
Anonymous	1609	*Everie Woman in her Humor*
Chapman, G.	1611	*May-Day*
Jonson, B.	1616	*Every Man In His Humor*
Anonymous	1619	*Two Wise Men & All the Rest Fooles*
Shakespeare, W.	1623	*The Merry Wiues of Windsor*
Anonymous	1629	*Wine, Beere, and Ale*
Mabbe, J.	1631	*The Spanish Bawd*
Brome, R.	1632	*The Northern Lasse*
Rowley, W. M. T.	1633	*A Match at Mid-Night*
Anonymous	1636	*The King and Queenes Entertainment at Richmond*
Heywood, T.	1638	*The Wise-Woman of Hogsdon*
Killigrew, H.	1638	*The Conspiracy*
Carlell. L.	1639	*Arviragvs and Philicia*
Chamberlain, R.	1640	*The Swaggering Damsel*
Jonson B.	1640	*Bartholmew Fayre*
Quarles, F.	1649	*The Virgin Widow*
Cowley, A.	1650	*The Guardian*
Tatham, J.	1660	*The Rump*
Flecknoe, R.	1667	*The Damoiselles a la Mode*
Cavendish, M.	1668	*The Convent of Pleasure*
Caryll, J.	1671	*Sir Salomon*
Lacy, J.	1672	*The Dumb Lady*
Dryden, J.	1673	*Marriage A-la-Mode*
Crowne, J.	1675	*The Countrey Wit*
Wycherley, W.	1675	*The Country Wife*
Etherege, G.	1676	*The Man of Mode*
Betterton, T.	1677	*The Counterfeit Bridegroom*
Leanerd, J.	1677	*The Country Innocence*
Howard, E.	1678	*The Man of Newmarket*
Ravenscroft, E.	1681	*The London Cuckolds*
Behn, A.	1682	*The False Count*
Otway, T.	1684	*The Atheist*

Boyle, R.	1690	*Mr Anthony*
D'Urfey, T.	1691	*Love for Money*
Mountfort, W.	1691	*Greenwich-Park*
Congreve, W.	1693	*The Old Batchelour*
Dilke, T.	1696	*The Lover's Luck*
Vanbrugh, J.	1697	*The Relapse*
Farquhar, G.	1699	*Love and a Bottle*